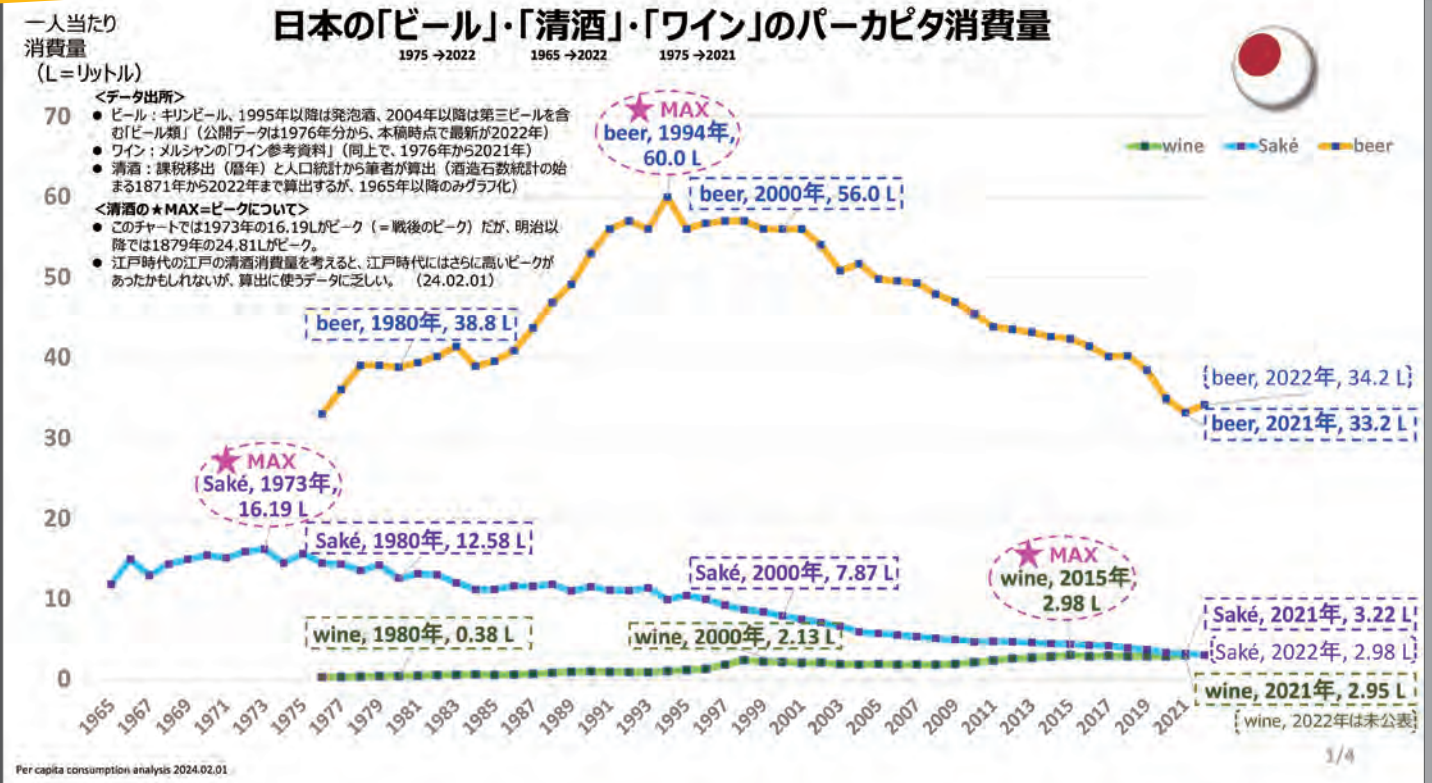


ちょっと意外な酒類の統計、あまり知られていない統計データを、ビジュアルな資料でご紹介するコーナー。当社で蓄積しているデータを不定期連載でお届けします。

今回は、「パーカピタお酒消費量」と「お酒の基本3法則」です。



お酒の消費には、1. 「先進国における伝統酒減法の法則」、2. 「グローバル化に伴う酒類多様化の法則」、3. 「アルコール摂取量減少の法則」という、「お酒の基本3法則」があると考えています。今回は、「パーカピタ」(per capita=一人当たり)消費量で、この基本法則を検証してみます。

●図1・日本の「ビール」・「清酒」・「ワイン」のパーカピタ消費量

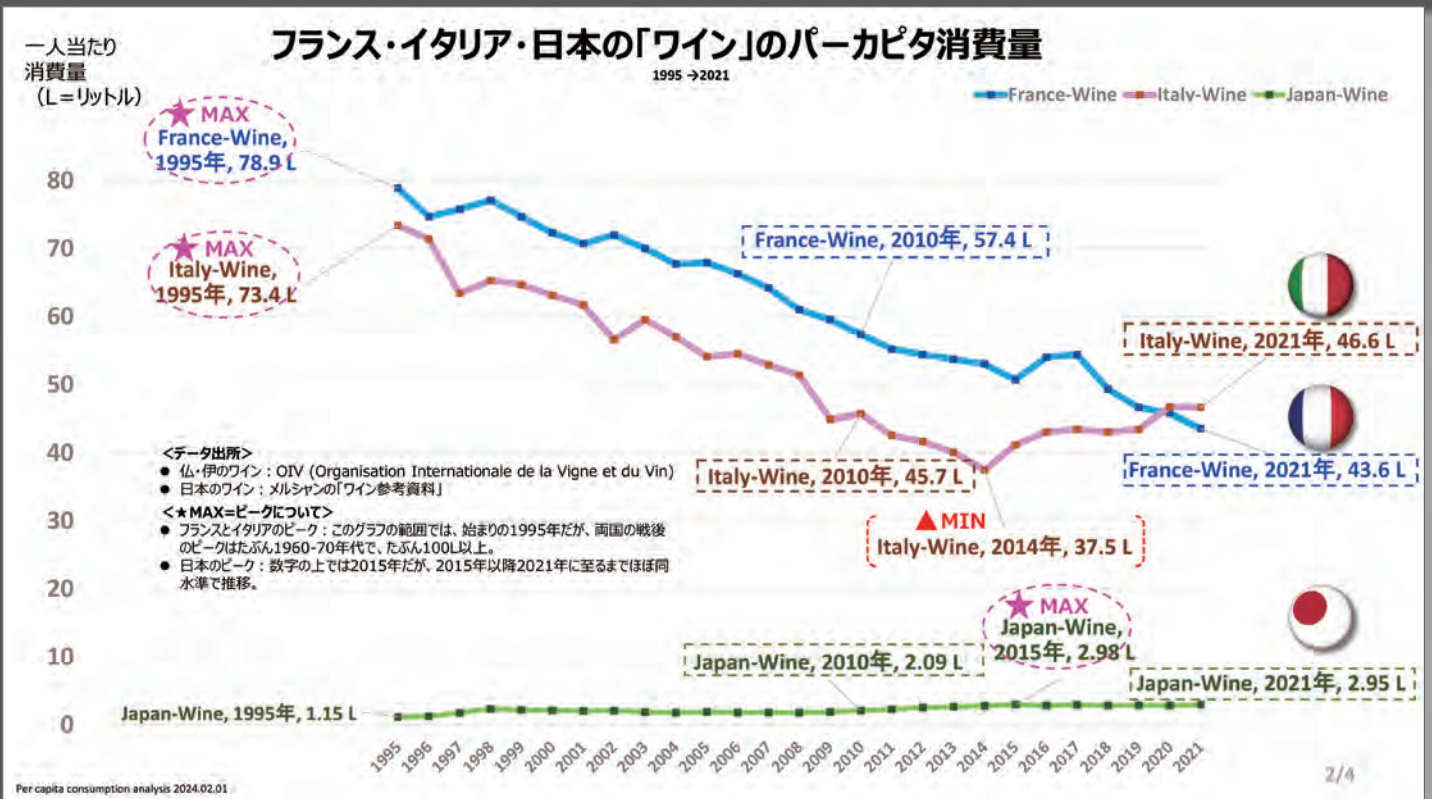
「ワイン」は、母数が小さいこともあって、1980年→2021年の41年間で0.38Lから2.95Lと、7.8倍になりました。「グローバル化に伴う酒類多様化の法則」の代表例といえます。グラフを見て、ワインと清酒のパーカピタ消費量が今や同水準であることに驚きます。ただ、ワインは、「酒類多様化」による増加フェーズのピークになりつつあるように見えます。2030年ごろには減少フェーズに入るのではないのでしょうか。

一方、日本の伝統酒である「清酒」は、ピークの73年→22年の49年間で、16.19Lから2.98Lへ18%まで縮小。「先進国における伝統酒減法の法則」を如実に示しています。逆に、清酒は海外市場では、「グローバル化に伴う酒類多様化」で、今世紀に入って大きく伸びたし、今後も伸びる余地は大きいです。

●図2・フランス・イタリア・日本の「ワイン」のパーカピタ消費量

言うまでもなくフランス・イタリアの伝統酒はワインで、人口が7,000万人程度にもかかわらず、世界1位・2位のワイン消費国です。グラフの通り、1995年→2021年の26年間で、それぞれ55%、63%に縮小。「先進国における伝統酒減法の法則」を体現しているほか、「アルコール摂取量減少の法則」にも当てはまります。このグラフの範囲のピークは、始まりの1995年ですが、両国の戦後のピークは1960-70年代のはずで、100L以上の消費をしていたと思います。

フランス・イタリアのワインの減り方は日本の清酒（同期間で27%に縮小）に比べるとだいぶましですが、フランス・イタリアのワインも、日本の清酒も、「半世紀にわたつ



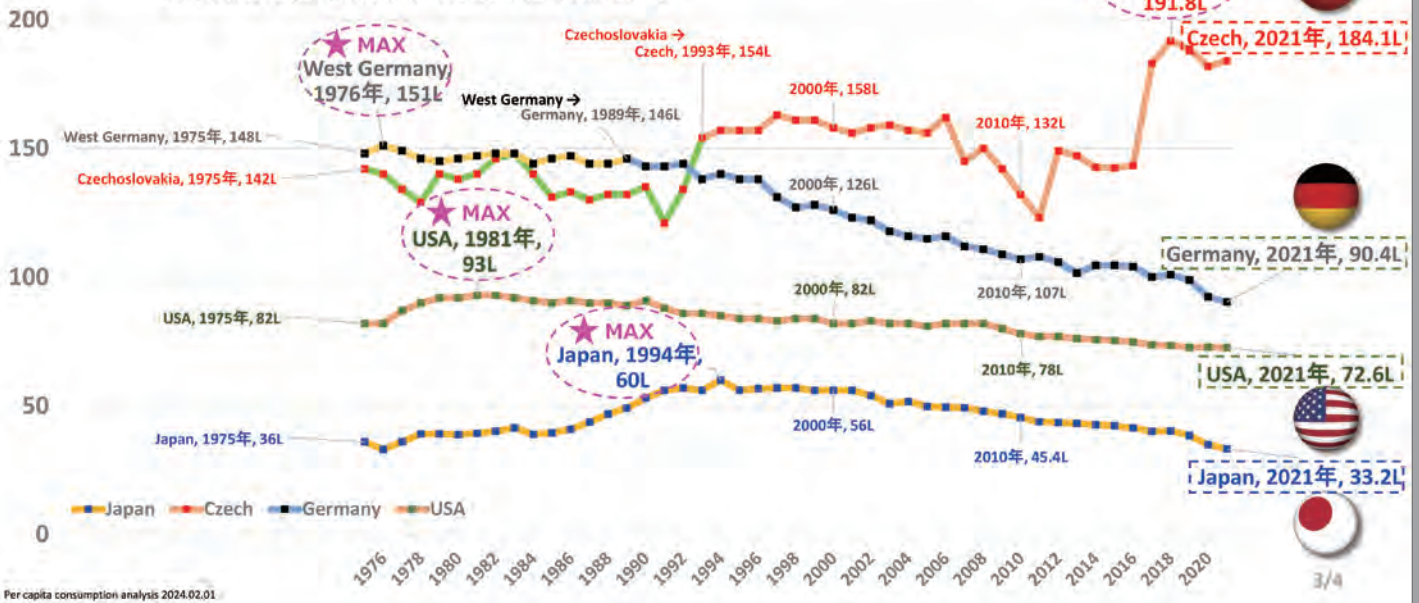
ドイツ・アメリカ・日本・チェコの「ビール」のパーカピタ消費量

1975 → 2021

一人当たり消費量 (L=リットル)

<データ出所など>

- キリンが1975年以降公表する、世界のビール生産・消費統計
- 日本：各国一人当たりのデータは上位25か国のみで、日本の記載のない年がある。それについては独自計算した数字。1995年以降は発泡酒を、2004年以降は第三ビールを含む。
- ドイツ：1988年までは西ドイツのデータ、1989年以降は東西統一ドイツのデータ。
- チェコ：1992年まではチェコスロバキアのデータ、1993年からはチェコ共和国のデータ。



Per capita consumption analysis 2024.02.01

で減り続けている」のは同じです。ただ、グラフを見るとイタリアは近年、若干増加傾向で、下げ止まったような感じ。「伝統酒減法の法則」にも、底があるのだと思います。
日本の清酒も、2030年前後には下げ止まると考えます。

●図3・ドイツ・アメリカ・日本・チェコの「ビール」のパーカピタ消費量

ドイツの数字は、「先進国における伝統酒減法の法則」を示しますし、日・独・米3か国の減り方は、「アルコール摂取量減少の法則」を示しています。また、日本のビール類の減少の背景には、需要がRTDにシフトしたことがあります。これは「酒類多様化の法則」を反映しているといえます。アメリカでも、ハードセルツァー (RTD) の需要が増えていることが、ビールの減少につながっています。

ただ、チェコ (パーカピタで、ダントツ世界一のビール消費国) は例外のケースのようで、伝統酒のビールが近年伸びています。(2017年から急に増えていて、アサヒがビルスナーウルケルを取得して統計の母数が変わった?などの影響もありそうに思うのですが。) もちろん、法則には例外あり、と言えます。

●図4・世界の「ビール」・「ワイン」のパーカピタ消費量

ビールの世界消費量 (キリンなどの公表値) と、ワインの世界消費量 (OIVなどの公表値) を、国連の人口統計で割り算したものです。半世紀以上のスパンで見ると、ワインは長期的な漸減傾向、ビールは戦後、長年のあいだ成長してきましたが2010年ころから減少傾向です。

高齢化・人口減少の日本では、基本3法則のうち第3法則「アルコール摂取量減少の法則」がこれから支配的になります。世界では、あと数十年は人口増が続きますが、やはり第3法則が支配的になり、お酒は世界総消費量では大きく伸びることはないと思われます。そんな前提で、グラフに**2050年のパーカピタ消費量の予測例、ビール = 20.6L とワイン = 2.6L**を書き入れました。酒類に限らず多くの消費財が、今後は総量的拡大のない状態へ推移すると考えます。(text = t.kita)

世界の「ビール」・「ワイン」のパーカピタ消費量 + 100年の「世界人口」

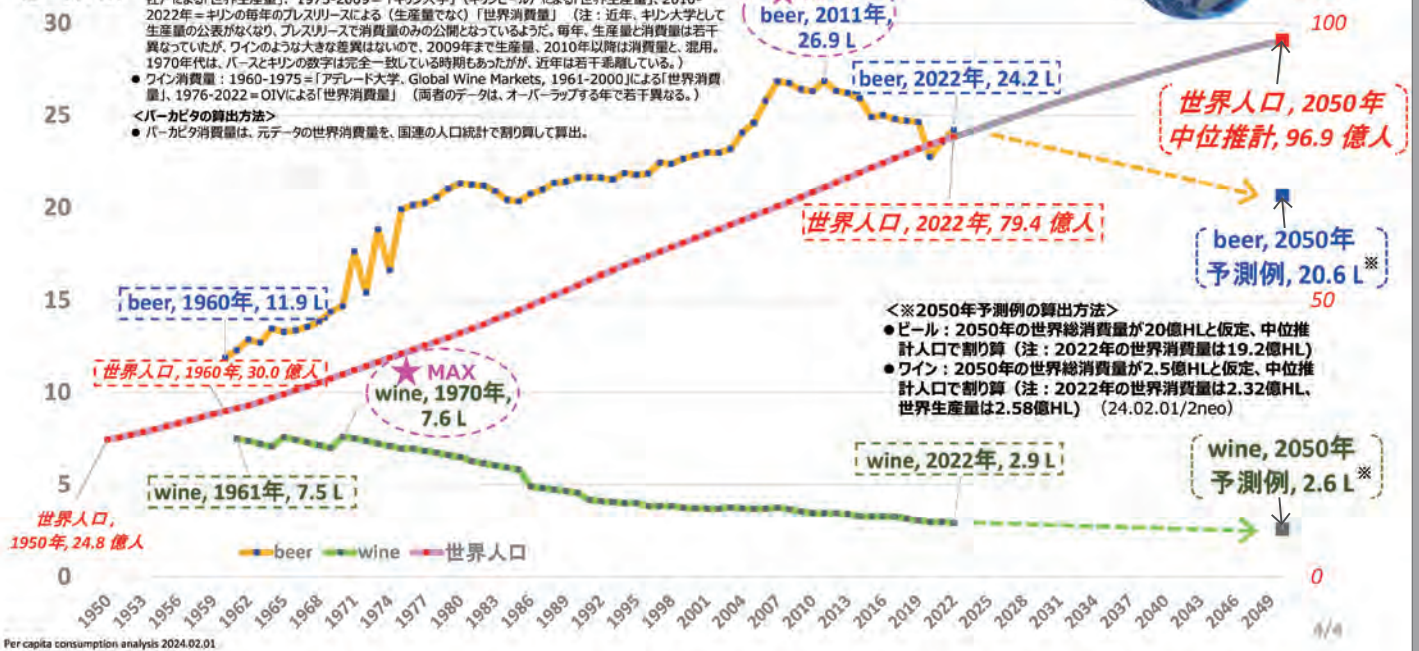
1960 → 2022

1961 → 2022

1950 → 2022 → 2050 (中位推定)

一人当たり消費量 (L=リットル)

- <元データ出所>
- 世界人口：国連Population Div.の2022年公表値 1950-2021 = 実数、2022-2050 = 中位推定値。
- ビールの世界生産量・消費量：1960-1975 = 「バースレポート」(ドイツのポプの会社。BARTH-HAAS社)による「世界生産量」、1975-2009 = 「キリン大学」(キリンビール)による「世界生産量」、2010-2022年 = キリンの毎年のプレスリリースによる(生産量でなく)「世界消費量」(注：近年、キリン大学として生産量の公表がなくなり、プレスリリースで消費量のみが公開となっているようだ。毎年、生産量と消費量は若干異なるが、ワインのような大きな差異はないので、2009年まで生産量、2010年以降は消費量と、混用。1970年代は、バースとキリンの数字は完全に一致している時期もあったが、近年は若干乖離している。)
- ワイン消費量：1960-1975 = 「アデルド大学、Global Wine Markets, 1961-2000」による「世界消費量」、1976-2022 = OIVによる「世界消費量」(両者のデータは、オーバーラップする年で若干異なる。)
- <パーカピタの算出方法>
- パーカピタ消費量は、元データの世界消費量を、国連の人口統計で割り算して算出。



Per capita consumption analysis 2024.02.01